ホラーゲームは割とエロいが
当事者になると話はべつだ！

一

俺は、ホラーゲームは割とエロいと思っている。

皮膚が黒ずんでただれて、表面が粘着質な液体にまみれた、奇怪な形をしたクリーチャー。

そんな気色わるいクリーチャーが、プレイするキャラを噛みついたり、丸のみにしたり、押しつぶしたり、引き裂いたりするのを見ると、腰が熱く疼く。

まあ、俺は男だから、女のキャラに限るが。

クリーチャーが女キャラを惨殺するのを見て、下半身が元気になる男はけっこういる。
動画配信サイトで、女キャラの死亡シーンだけを集めた動画が公開されれば、「ちょっと、トイレに」「ごちそうさまです」といった下劣なコメントが溢れるほど。

すくなからず同士がいるとはいえ、誤解されやすい嗜好なのは百も承知。
元カノは、俺が例の動画とコメントを見ているのを覗き「わあ、犯罪者予備軍がいっぱい」と頬を引きつらせたもので。

今から思えば、その一言がきっかけで別れたように思う・・・。

いっておくが、現実の俺は人を一回も殴ったことがなければ、殴られ

たこともない、極極平凡で、どちらかというと気弱な男だ。
現実に暴力沙汰を目の当たりにすれば、膝が震えるし、映画の残酷なシーンは直視できない。

ただ、CGのホラーゲームなら、オールオッケー。
どれだけ残虐に人が痛めつけられ殺されても眉ひとつ動かさず、女キャラがクリーチャーにやられれば、夜のおかずに。

この心理は解せないだろうが、ゲームでしている蛮行を現実でもしたいとは決して思わない。
そもそも現実世界にクリーチャーはいないし、いたとして、きっと俺は真っ先に殺される雑魚だろうし。

たとえ、男キャラ、ゴリ男がプレイできても、クリーチャーに疑似フェラをされるシーンなんて見たくないし、ましてや自分が、先端に男性器がついたような触手に体を撫でまわされるなんて、死んでも御免。

そのはずが「ふあ、ああん、だ、だめえ・・・！」と体をくねらせ、悩ましい声をあげてしまい。

俺は非童貞だし、それなりに異性との恋愛経験を積んできた。が、体を触られて、恥ずかしげもなく、あんあん鳴きながら、だらしなく股を濡らしたのは初めて。

奇怪なクリーチャー相手に、まったく、どうかしている。
しかも愛撫するのは手でなく、男性器のような触手だというのに。

「はう、はあん、む、胸え、ああ、あん、なん、で、こんなあ、か、体、おかし、ひゃあう、あう、ああん！ら、らめえ、三つ、もお、ふあ、ば、ばかあ、早、しな、でえ・・・！」

お漏らしをしたのが、触手の体液に混じって、耳塞ぎたくなるようなねちっこい水音を。
男性器に似た先端が、ひたすら奉仕するのに、どんどん追いつめられていったものを「孕ませるマンにイかされたくない！」とどうにか踏んばる。

その抵抗に気づいたのか、触手がもう一本追加。

俺の先端と、触手の男性器のような先端をくっつけ、じゅぷじゅぷと押しこんでくる。
合わせて、胸の突起も、先端の窪みに挟むようにし、荒っぽく揺すって。

亡きあとも美しい少年は
鬼に囚われている

俺は死に場所を求め、山奥のある村へと赴いた。

ここには登山者がぼちぼち訪れる穴場の山がある。
上級者むけで、一年に数人が遭難したり、崖から落ちるなどして亡くなるというに、事故に見せかけて自殺するには、ちょうどいいかと。

心の準備をするため、すぐに山には踏みこまず、旅館で一泊。
ベテランの登山者を装いつつ、女中さんに怪しまれないよう「この山で、なにか変った見どころはありますか？」と聞いてみたり。

宿泊客がすくなく、暇らしい女中さんは「ありますあります」と前の

めりになりつつ「あ、お客さん、こわいの平気ですか」と質問。

「夜に一人でトイレに行けるくらいには平気ですよ」と軽口を叩けば、笑ってくれたものを、すぐに声を潜めて「じつは・・・」と語りだした。

「ここらへんは昔、凶暴な熊が多くいたそうで。
一年に何十人と殺されていたのだとか。

それでも、村の人は山を離れなかった。
なにせ山が豊かで住みやすく、あまり田畑を耕さなくても、十分に食べていけたから。

なんとか対策をしようにも、その時代に鉄砲はなかったし、矢や刃を

跳ねかえすほど熊は頑丈で、お手上げだった。
それがある日、村長が襲われたとき、通りかかった鬼が一ひねりで熊を倒してくれたそうです。

熊の脅威を退けるには、この手しかないと考えた村長は、鬼に懇願をした。

どうか村の近くに住んで、熊から守ってくれないか。
そのお礼に、酒や食べ物など望むものをできるだけ貢ぐので、と。

それだけじゃ足りないと、鬼はさらに要求をした。
年ごろの見目のいい女を一年に一回、差しだせと。

村で話しあった結果、鬼の要求を飲むことに。

そうして、しばらくは鬼に守ってもらって、村は平和でいました。
けど、その年、生贄にする女の子が、よそ者の男とかけおちをしてしまった。
ほかに年ごろで、見目がいいのはいない。
そう言い訳をして、生贄を差しださなければ、鬼は村を見捨てるか、逆上して牙をむくかもしれない。
おそれた村人は、女の子の双子の片割れ、男の子に女装をさせて差しだした。
鬼は生贄を食べるものと、村人は思ったようで。

「あーあ、いっぱい漏らしちゃって、俺の手、べっとべとだなあ。
あまり、ふだん自分でシコシコしないの？
まさか、精通もまだだったりして？
なんか、俺、未成年をおもちゃにする性犯罪者っぽくない？
無垢な子供の清らかな体にイタズラしているみたいで、良心が咎めちゃうよ。
まあ、ぶっちゃけ、毎夜毎夜、頭の中でおまえを犯しまくって、げへげへ涎を垂らしまくって、ごちそうさましているけどね」
両手に精液をつけると、着物の襟を開いて、胸にべっとりと。

精液をなすりつけながら、手のひらを揺らせば「ふあ、ああん、しぇんせ、の、助平え・・・！」と早早に再勃起して、だらしなくお漏らしを。

「やあ、胸、ない、のに、揉んじゃ、やらあ、あう、あん、あん、ああ、ら、らめえ、また、でちゃ、くう、は、はあう、ひいあああ！」

予想以上に反応が上上で「くく、男の子なのに、おっぱいを揉まれただけで？」と濡れた胸を見て、にやにや。

「やあ、そんな、きたな、の、せんせ、見な、でえ・・・」と胸を腕で隠すのは逆効果というもの。

肩をすくめて「分かった分かった、見ないよ」といいつつ、とびちっ

た太ももやお腹を舐めまわす。
それだけで、あんあん腰を跳ねて、すぐに復活したのから先走りを散らしたものを、中心には舌を滑らせず。

そのうち「せん、せい、せんしぇ！」と俺の髪を手で梳きはじめて。
舌を退けると「ん？どうした？」とお漏らししっぱなしのそこに、話しかける。

「ちゃんと言葉にしないと、先生、分からないよ」

俺とやらないか
さあ やろうぜ
よし やりまくるぞ

暗く狭いところに体を縮めながら、息を殺していた。
隙間から覗ける、ドアの向こうは無人なれど、静かなものだから、壁の向こうの廊下を歩く足音が聞こえる。

そのまま遠ざかるかと思いきや、部屋のドアがけたたましく開けられ男が三人、入室。

「俺とやらないか！」「さあ、やろうぜ！」「よし、やりまくるぞ！」と順番に喚きながら、カーテンを開いたり、棚の下を覗いたり、物をどかしたり。
肩を震わせつつ、呼吸音がしないよう口を手でふさぐも、心臓の爆音

が漏れそう。
まさか聞こえたとは思わないが、俺が隠れるロッカーが端から開けられていき。

いっそ跳びだし、一目散に部屋のドアに走るか。
悩むうちにも、ロッカーの扉はどんどん開けられて、もう万事休す。

かと思ったのが「うわあああ！助けてくれ！」と二つ隣のロッカーから悲鳴が。
俺がロッカーにはいるまえから隠れていたのだろう。

命乞いに聞く耳を持たず「拷問プレイをやらないか！」「さあ、三角木馬に乗せようぜ！」「よし、木馬責めをしまくるぞ！」と繰りかえし喚きつつ、三人で彼を抱えあげ、部屋のドアへと。

ドアを開け廊下にでて間もなく「ああ！やめ！そ、そんな！くう、あああ！」と彼の悲痛な叫びと、あられもない喘ぎが聞こえ、たまらず耳を手でふさぎ、目を瞑った。

奥歯を噛みしめながら「どうして、こんなことに・・・！」と嘆いたもので。

ドアの向こうはベビーベッドを中心に、ぬいぐるみやオモチャが敷きつめられた、赤ちゃん用の部屋っぽい内装。

ダブルベッドサイズのベビーベッドに放られても、俺はショックから立ちなおれず、呆けたまま。

危機感を覚えず「赤ちゃんプレイって、俺が赤ちゃん役？」と他人事のように考えているうちに、三人が背をむけて、なにやら、ごそごそ。

三人一斉にふりむいたなら、レースのついたほっかむりを被り、おしゃぶりを咥え、これまたひらひらしたレースのまいかけを装着。

海パン一丁の装いだから、まぬけなような、ホラーのような。

さすがに「そっちが赤ちゃん！？」とぎょっとしたとはいえ、起きあがるまえに二人がおしゃぶりを放り「ママ！」とベビーベッドにダイブ。

太い腕にラリアットされて「ぐえ！」と呻く間もなく、Tシャツと下着をまくられ、ない胸を揉まれ、おしゃぶりの代わりに突起を咥えられて。

豊満なおっぱいを揉むような手つきで、突起を舐めてしゃぶり吸い食んで噛んで、もう片手を下半身に。

あっという間に剥きだしにしたら、二人でにぎりこんで、空のチューブを押しだすようにシコシコと。

「はあ、あう、や、やめ、俺、ママ、じゃ、ああ、くう、ば、ばかあ、でな、い、てえ、ひいあ！ああ、あん、あん、あああん！や、やあ、そこ、はあ、でちゃ、やあん、そ、そんな、二人、で、だしちゃ、は、はあ、はあう、ばか、ばかあ、お乳、じゃ、な、ふああ！やあ、やめえ、強お、あ、ああ、で、でちゃ、でちゃう・・・！」

抗う暇もくそもなく、赤ん坊に扮した男二人に性急に搾りだされて「ひやうあああ！」と大量射精。

と、ほぼ同時に、両脇の二人が退き、立って見おろしていた一人が「ママ！」とベッドに跳びこみ、俺の精液まみれのを咥えこんで。

白濁の液体を旨そうに舐めとり、しきりに喉を鳴らし、さらに搾りだすように両手でにぎって絞めつけ上下させながら、先っぽをちゅうちゅう。

次次と大波のように快感が押しよせて、身をゆだね、乱れ狂ってしまいそう。
ぎりぎり理性を保ちつつ「イった、ばっか、でえ、らめえ！」と首を振ることしかできず。

おまけに、一旦は身を引いた二人が海パンをずらして、精液でてらてらする剥きだしのを、胸にこすりつけてくる始末。
突起をちゅぷちゅぷ濡らしながら、固い先っぽで揺さぶってくる。

双子はこながり地獄の釜は閉ざされる

真夏の最中、蝉しぐれを浴びながら、友人たちと下校中。

友人と笑いあっていた視線を、ふと逸らすと、むかいから白いワンピースを着た女性が。

垢ぬけた格好と雰囲気の美人で、ここら田舎の人でなさそう。

はたして彼女は、ちょうど目があった俺に「あの、ちょっとお聞きしていいですか」と声をかけてきた。

差しだしたスマホの画面には、彼女と年の近そうな若い男。

スマホを覗きこむ俺と友人に聞いたことには「彼、四日前にこの町に

きたと思うんですけど、見かけませんでした？」と。
俺には見覚えなかったが、旅館の息子が「ああ」と声をあげて。
「うちの旅館に泊まって三日前にはでていきましたよ」
「どこに行くか、いっていませんでしたか？」
「たぶん、奈落の底を見にいったんじゃないかなあ」
「奈落の底？」と彼女が首をかしげるのに、こんどは観光会館に勤める親を持つ友人が説明を。
この町の観光名所の一つで、山に囲まれたところに深い崖がある。

高い山に遮られ、陽光が差さないので一日中暗く、崖の底も影がかって見えない。

そのことから「奈落の底」と呼ばれ、また、いいつたえでは、闇におおわれた崖の底には「地獄の釜」があるとされている。

ふだん地獄の釜は、蓋が閉まっているものを、一年に一回、お盆の日は押さえつける力が緩まり、地獄の住人たちが漏れでる危険が。

「それを防ぐため、儀式と祭りをするんですよ。
あとすこしで、その日を迎えるんですけどね」

じつは観光地としてだけでなく、自殺の名所であることでも有名なのだが、友人は口にせず、俺たちもだんまり。

調べるうちに知るだろうものを、おそらく男の行方を捜している彼女に、自らの口で伝えるのはためらわれて。

それ以上、俺たちは男の情報を持っていなかったが「もうひとつ、お聞きしたいのですが」と彼女は食いさがり。

「神田家をご存知で？
名字はちがうとはいえ、どうやら彼、そこの家の血筋らしいんです。
だから、神田家のお寺を訪ねたのですが、門財払いをされて」
神田家とは、昔からお盆の儀式を執りおこなっている一族だ。

葛藤し迷っているうちに、月白の頭がさがっていき、短パンと下着をずらし、俺のをにぎって舐めた。

慌てて「月白！」と頭をつかもうとするも、巧みな舌づかいに「くう、はあ・・・」と体の力がぬけてしまい。

ねっとりと舐めあげ、両手でにぎり扱きながら、先っぽを咥えて頭を上下。

健気に奉仕されて、そりゃあ心身、燃えるように高ぶったが、想像していたより、ずっと手慣れているような。

これが初めてか？と疑うほど。

まさか、ほかの男のもしゃぶったことがある？
もしかして陽赤じゃあ・・・。

「儀式の練習と称して、陽赤と体を触りあい舐めたのでは」と疑念が湧き「ふ、うう、は・・・！」と喘ぎを飲みこんで、月白の肩をつかんだなら押し倒す。

きょとんとするのを睨みかえし、早早、下半身を剥きだしに、顔を接近。
が、咥えようとして、目を見張り硬直。

月白のは毛が生えていなく、幼児のように小さかったから。
背が低く華奢とはいえ、年不相応なそれ。

幼児を犯すような錯覚がして、一瞬、ためらうも、小さくも勃起して濡れているのを見て、また「ぼくは、いいから！」と頭を引っかくのに煽られて、いただきます。

丸々咥えこんで、しゃぶしゃぶしながら、舌をまとわりつかせて、もみくちゃに。

「陽赤より鳴かせてやる！」と躍起になれば、演技なのか「ああ、なに、これえ・・・！」と月白は初心な反応を。

「ぼ、ぼく、小さ、から、恥ずか、ひゃあ、ああ、ああ、ああん、口、おっき、はあ、あう、た、食べ、られ、そ、やあん、や、やあ、吸わな、でえ、あ、あん、ああう、で、でちゃ・・・！」